

吉村昭『仮釈放』

——個人的「論理」と更生との距離

はじめに

吉村昭の『仮釈放』（昭六三・四、新潮社）は、殺傷事件を起こして無期懲役の判決を受け、一六年の服役後仮釈放中の身となった犯人菊谷史郎が、第二の殺人を引き起こすまでの過程を描き出す。

作品は、菊谷の胸中にくすぶる個人的な論理を繰り返し浮かび上がらせる。それは、刑が確定しても変わることはなく、「被害者」は彼にとつてはいつまでも〈自分に罪を犯させた憎むべき対象〉でしかない。収監後の彼は、自由の身を切望するが故に模範囚となつて仮釈放の処遇を手に入れ、保護観察中も良好な社会復帰を果たしていると判断される。が、生活態度の几帳面さは彼の反省を裏けるものではない。模範的に順調な菊谷の社会復帰への過程と、一貫して緩むことのない「被害者」への憎悪の念は、罪を犯した人間に、それが罪であることを認めさせ、改悛の情を持たせることの困難をうかがわせる。

また、彼は自分の妻となつた二人の女性とともに殺している。そして、どちらの妻に対しても、直前まではまずまず良好な関係を営みながら、突然それを断ち切るように被害にいたる。菊谷は初犯時

にもう二人殺傷せしめているが、この時も主たる殺害対象は最初の妻であつた。川西正明は「解説」の中で「二度も殺人を重ねてしまうこの男の「悲劇」が作品の主題である」と述べ、清原康正「吉村昭・人と作品」や木村暢男編「吉村昭——人と作品」も、社会復帰する菊谷の葛藤を中心に据えるにとどめてている。しかしながら、重ねた罪がどちらも「妻殺し」であることは軽視できない。

四人もの人間を死傷せしめた菊谷だが、元は平凡な毎日を静かに暮らす、周囲の人望も篤い穏やかな国語教師であつた。殺人者という特定の人種がいるわけではなく、ある時、心のある部分に何らかの感情が発生したときに誰にも殺意が生じる可能性があるのだとすると、菊谷の場合は、「妻」との関係性に何らかの鍵があるとみてよいのではないか。

本稿では、一度目の犯行の性質を跡づけた上で、それに対する服役・保護観察が彼に何をもたらし、何をもたらせられなかったのか、そこに連なる再度の〈妻殺し〉がなぜ避けられなかったのかについて考察を深めてみたい。それは、刑法犯罪の半数以上が再犯者によるという日本の現代社会を考えることにもつながるのではないだろうか。

小林 美恵子

一 菊谷の中の恵美子

西川政明は、主題についての先の言葉に続けてドフトエフスキーの『罪と罰』⁷⁾との比較を行い、「ラスコルニコフが直面したのは、殺人の人間性であり、そこには殺人を実行することの人間的な苦しさ、困難さが横たわっていた。それに対して『仮釈放』の主人公の場合には、ラスコルニコフのような殺人を実行することの人間的な苦しさ、困難さはどこにも見られない。そのかわりに殺人があまりに冷静に実行されることからくるたやすさの恐ろしさがある」とも述べている。

妻の体に庖丁をふるっていた時、木工職人が所要所に釘を的確に打ちこむように体の各個所に力をこめてふり下ろした。
(略) そのようにおびえることの多い性格であるのに、妻を刺殺した時、なぜ冷静であったのだろう。刃先を突き立てるたびに血がほとばしり出たが、その情景が胸によりみえつつも気持は冷えている。(第七章)

かれは、激しく逆上もしなかったし、咄嗟に殺意を生じたわけでもなかった。窓のカーテンの隙間から妻の腿とその上に重なる望月の臀部を眼にした瞬間から、急に全身が清冽な水にでも洗われたように冷静になるのを意識した。殺意と言えるものではなく、足が動いて家に入り、手が包丁の柄をつかんで望月について妻の体に刃先を突き立てつつただけなのだ。(第八章)

たしかに菊谷の犯行の描写は「冷静」と表現するにふさわしく、

無駄のない手順で行動がこなされていく。が、それが「たやすさ」かどうかは、もう少し留保してみたい。菊谷の犯行は、二度とも「朱の色」と表現される「真空状態」(西川)の中で引き起こされている。それが菊谷の殺人に「冷静」「たやすさ」を可能にし、「人間的な苦しさ、困難さ」が不在とする根拠を提供している。ここで菊谷の「殺意」を、初犯時に限定して跡付けてみたい。そのためには、遠く三〇年ほど前まで遡る必要がある。⁸⁾

菊谷と妻の恵美子は、学生時代にアルバイト先で知り合った。働きながら学ぶ者同士通じ合うものを持ちあいつつ交際を深め、菊谷が高校教師の職を得たことで結婚の運びとなった。恵美子が妊娠できない身体であることが判明した後、菊谷は妻をいたわり、趣味を見出した妻に積極的に協力し、二人の暮らしを大切に営んできた。菊谷は安定した日常をこよなく愛する男であり、その維持のために慎重に努力してきた人間である。菊谷の側に立つて語られる夫婦の歴史の描写には、彼に夫としての落ち度は読み取りにくい。

そんな彼だからこそ、青天の霹靂とも言うべき妻の裏切りに対し、針が瞬時に振り切れるような動転を味わったのであろう。不貞の現場を目にした瞬間、菊谷の中で彼の人間性の核のようなものが壊れてしまったに違いない。しかもその壊れ方は、じわじわと蝕まれてゆくような壊れ方ではなく、硬質のものが割れ砕けるような壊れ方であった。いわば菊谷は死んだ状態で犯行に及んだわけであり、それが冷静と呼ばれる状態になったということではないか。あるいは、菊谷本人は別の解釈をしている。

自分の内部には、為体の知れぬものがひそんでいるらしい。そ

れが、自分の体を包みこんできた朱の色に象徴されていたのか。殺すという行為に自分を駆り立てたのは、そのきらびやかな色によるものとしか言いようがなく、論理的に第三者に説明するのは不可能であり、自らをも説得させることはできない。(第七章)

菊谷自身の人間性が仮死状態であつたにせよ、あるいは別人格が現れたにせよ、菊谷本人の人格がコントロール不能に陥つていたことは間違いない。したがって、菊谷が犯行時、苦しさ・困難さがみられないがゆえにたやすく殺人を犯した、とはいえない。彼は困難を味わうプロセスを持たぬまま、妻と妻の浮気相手望月とに、先手打って人間性を殺され、「真空状態」の中で逆襲に出たということになる。

それにしてもなぜ菊谷は、我が身に起こつた困難をいったん受け止め、苦悶する時間を持てなかつたのだろうか。夫婦間の不和の多くが長期にわたる灰色の時間を経るのに対し、妻の裏切りを知るや瞬間的な破滅に至つたのはなぜだったのか。

菊谷は、妻の命を奪うに際し、彼女と一言のやりとりも交わしていない。現場を目撃したのだから問答無用であるというのが彼の言いぶんだらうが、それにしても妻に問い正したいことが何らなかつたということは不気味である。望月の妹が出したという密告の手紙で疑いを抱き始め、閨の現場に踏みこんで事実を確認し、殺害に至る。この間わずか二日ほどである。恵美子が菊谷から受けた刺し傷は八カ所に上つたという。

自分の前で楽しそうに暮らしていた妻としての姿はすべて嘘だつ

たのか、なぜ、いつから望月に馴染んでいったのか、望月への思いは深い愛情なのかそうではないのか。自分からみた夫婦関係が円満であつたぶん、そうではなかつた欠落部分を知りたいという思いは、怒りと興奮で霧消してしまうものなのだろうか。裁判の過程でそれ考えることがあつても、「貞淑である」と信じていた妻」が「望月と性の営みにふける姿」を知らされるにつけ、菊谷は「やはり妻を殺してよかつた」と自分一人の論理の中で正当性を再確認している。彼には、貞淑でない妻は抹殺すべきという考えがある。「貞淑」という言葉は美しいが、自分の定める基準に外れることは許さないという単なる横暴に過ぎない。この横暴という一面から掘り進めていくと、夫としての菊谷のゆがみが他にもみえてくる。

「妻が望月と不倫な関係をつづけていたことを、君は少しも気づいていなかったのかね」／検事の質問に、菊谷は、はい、と弱々しく答えた。／服役後も、しばしば思い返してみたが、それと考えるような要素は考えつかなかつた。(中略)「それにしても、なにかおかしいと思ったことはなかつたのかね」中年の検事の眼には、笑いの色がうかんでいた。／検事は、鈍感さを滑稽なものとして蔑んでいるのだが、菊谷は気恥ずかしさを感じながらも首をかしげただけであつた。／なぜ、不審感を抱かなかつたのだらう。恵美子の演技が巧みであつたからと考える以外になく、かれは、まったく知らぬ妻の一面をみるような思ひであつた。(第六章)

すでに望月との関係が始まつていた期間においても、家の中は変

化がなく、菊谷の言葉によれば「性生活も満ち足りて」いたという。が、仮に恵美子が異性との情交を積極的に欲する女性だったとしても、いささかの異変もないとは信じがたい。菊谷には、自分が夫として妻を幸せにしてやっているという自負が濃厚にあったために、視野に入れるべきものが入らなかったということがあったのではない。

子供が出来なかったのは、妻の身体の事情である。「かれも失望したが、彼女の気持ちも察して、二人だけで生きてゆこうと言って励まし、彼女の前で子供について口にすることはしなかった」。が、恵美子は、保母になるために働きながら夜間の短大に通っていた。卒業と同時に結婚したのは、自分の子供を育てることで保母への願望は代替可能と見込んでいたためであろう。子供が持てないという事実を前にした時の夫と妻の受け止め方の違いは、菊谷が思うよりも隔たっていたのではない。恵美子が、子供は不可欠という人生観の女性であった場合、その落胆はかなり深刻であったと思われる。このことがどれだけ菊谷に理解できていたか。その後、恵美子は紅型染めに打ち込むようになり、年数を経て作品で収入が得られるほどにまでなっていた。菊谷は「妻の仕事に好感をいだき、部屋一杯に布を張るのを手伝った」という。が、この時も彼は、子供を持ってない妻に「淋しさをまぎら」す対象が見つかってよかった、という認め方でしかなかった。

総じて菊谷の妻への対し方は、優しいし、協力的だし、礼儀正しい。浮気もしないし、経済的にも安定している。が、これらは妻が彼の意に添って尽くす「貞淑な妻」である限りのことでしかない。菊谷には、恵美子が自分とは別個の人格を持つ一人の人間であると

いう意識が薄く、したがって彼女に異性関係が生じる可能性を考えることはなく、何らかに對して空しさを抱き、埋めるものを求めてさまよう姿など視界に入らなかったのだろう。

出所後の菊谷は、夢の中で恵美子と繰り返し対面している。彼女は「眼には居直った光」をうかべ、「口もとには拗ねたようなゆがみ」を見せているという。これは時を経て、菊谷にも妻の居直りをひき起こさせる何らかの部分があつたことに、自身が気づき始めていることの現われではないだろうか。

二 罪との対話

菊谷に用意されていた更生の機会は少なくない。服役中も看守や他の囚人とのトラブルもなく、科せられた作業に没頭して暮らした。その成果として仮釈放の処遇を受け、出所後は保護会の清浦、保護司の武林夫妻、雇用主の秋山と、恵まれすぎるほどに理解ある人々のサポートを得て、社会復帰は一時は軌道に乗ったかにみえた。

が、結果的には菊谷は再度の殺人を犯し、社会復帰は失敗に終わった。菊谷に言わせれば、一つ目の事件は先妻の不貞が原因であり、二度目は後妻に心を踏みにじられたことが原因ということになる。二つの事件は性質を異にしているように思われるが、初犯で未解決のままくすぶっていたものが燃え上がって再犯につながったのであるから、両者は一つの連なりの中で起こった事件ということになる。となれば、彼の十六年にも及ぶ服役生活や、彼の社会復帰を願った人々の尽力は、無に帰してしまつたと言わざるを得ない。

菊谷に用意された恵まれた更生の環境は、しかしながら一度たりとも彼の内面の個人的論理に對し、その是非を問ひかけ、疑わせる

機能を果たしていない。服役中の「悔恨の情」は、その作業に対する取り組みぶりで判断されるという。菊谷が評価された勤勉な作業ぶりは、第一章にも明らかなように、ひとえに自由の身を得たいという一念によるものであった。犯行の直接の標的でなかった望月の老母に対するかすかな悔恨こそあれ、結局菊谷は殺害した妻と、その浮気相手の望月に対しては、怒りや恨みの思いしか抱けていない。それは同時期に同じ刑務所に身を置いた高崎二郎への書簡にも如実に現われている。高崎は、菊谷と同じ殺人の前科を持つ男である。出所後、廃鶏業者の一員として秋山の養鶏場に赴いた際、そこで働く菊谷を偶然目にする。当初は身の上を明かされることを案じて菊谷に手紙をよすがが、次第に菊谷との間に師弟関係のようなものが生じていき、文通を通してお互いに支え合うような関係が芽生え始めていく。

私には本心を言つて欲しい。殺人という行為が、人間として最も忌むべき恥しいものだと十分に承知しているが、私には、不思議に妻に対する懺悔の気持が湧いてこないのだ。むしろ、やむを得ぬことであったという考えが強い。相手の男の母を死に追いやつたのは、予測もせぬ不意なことであつたが、その男のような人間を息子に持った母として、当然の成り行きであつたのだ、とも思う。君は、どうなのか。君の人間としての基本すら否定するような言動をした養母に対する憎しみは、跡形もなく消えたというのか。殺したことを本心から悔いているのか。(第八章)

ここには重要な問いかけがある。服役中も出所後も一度として抱くことのなかった自己の頑な論理に対し、菊谷がはじめて疑いをみせている。高崎という投げかけの相手を得たことは、菊谷が内面から自分を覆す絶好のチャンスであつた。菊谷は、自分と同じ境遇の高崎には初めて自分の論理を隠さず吐露し、自分の中の頑な「正義」を語り、反応を切望している。菊谷はこの対話の中で幾つかの反論を受け、自己の中で煩悶する時間を持つべきであつた。高崎は、菊谷の独善的な論理にゆさぶりをかけるという、清浦にも武林にもなし得ないことを唯一人なし得るキーマンだったといえよう。

清浦や武林らは、家族や縁者のすべてを失つた孤独な菊谷のよりどころであり、温かな心の支えであるが、彼らは、すでに菊谷が服役中に悔恨の情を抱いているという前提にたつた支えを与えるため、彼らの存在が菊谷の個人的な「論理」に修正の必要を感じさせたり、疑問を抱かせたりすることはない。彼らの前に立つ菊谷は、つねに模範的な出所者を装っており、彼らのやさしさに心を開いて身を寄せることはしても、深層にひそむ思いを吐露することはない。犯罪に無縁な清浦たちは、外から自分を保護してくれる他者にすぎず、胸中にくすぶる自分だけの思いを語る相手にはなりえないのである。もし、菊谷が自分の本心を語れば、清浦や武林は菊谷にいつそうの矯正が必要であることを認識し、何らかの指導を施そうとするだけであらう。

しかし、高崎は菊谷がこの問いかけを発する前に、姿を消してしまつた。それは、唯一自分が心を開いて正直に自分の罪についての考えを語れる相手の喪失であり、菊谷が自分の罪と対峙するチャンスの喪失であつた。仮に、高崎も自己の罪の正当性を語り、二人で

共感しあうことになったとしても、それを語る高崎の姿に、自己の頑さ、独善的な醜さを逆照射して見出す機会も持てたのではないか。そんな菊谷が次に得た対話相手の候補者が、豊子ということになる。

三 「豊子」という可能性の切斷

一度高崎という対話の相手を得かけた菊谷にとって、それを失ったことは思った以上の「うつろな気分」をもたらした。彼の中には「勤めから帰ってきて、動くものが、あたかも自分の帰りを待っているように部屋にいたら、どれほど気持がなごむだろう」という気持ちがあればはじめていく。その結果として飼い始めた目高であったが、それは高林や清浦の目には、菊谷の大きな変化、すなわち内発的な社会復帰への前進の姿と受け取られた。菊谷がやりとりの相手を求め始めたのは間違いなく、それは自分の罪を語る相手を欲する思いの延長線上にある。

折原豊子は、武林が息子に譲ったスーパーマーケットの従業員であり、菊谷は気づかなかつたが、武林夫人の心遣いで食品などを持たされる時、その包みを渡すなどしてすでに菊谷に接している女性であった。亡くなった前夫の酒癖に苦しめられ、暴力で流産したこともあるという豊子は、菊谷を「お気の毒な方」だと言い、過去を承知した上で菊谷との再婚に応じるといふ。菊谷には信じがたいことであった。

おそらく豊子は、受刑者への偏見を持たない、苦勞人ゆえの柔軟さを持ち合わせた女性であったのだろう。菊谷は、たとえば高崎の表現を借りれば「背が高く」、「インテリらしい落着いた顔」をして

いて、「こんな人がなぜ罪を犯したのか信じられない」という印象を与える人間である。菊谷の犯した罪を知りながら、そして菊谷とほとんど言葉も交わしたことがない身でありながら、豊子が結婚を望んだところからは、彼に男性としての容貌上の魅力があることも確認してよからう。豊子との縁談を遺言のようにして、高齡の武林が急死したこともあり、菊谷は不安を残しつつも豊子と暮らす決心をする。

が、菊谷は妻となる豊子を、自分の罪についてあるいは自分たちの将来について語り合う相手とは考えていない節がある。その証拠に、彼は豊子との顔合わせの場において、実のある会話を持とうとしない。彼が豊子を人生のパートナーと考えるのなら、自ら確認しておくべきことがあるはずの、大事な席である。最低限でも、自分の過去をすべて了承してくれるという豊子の意思は、菊谷が自分で問いかけ、直接本人の口から聞くべき重要な言葉であろう。

朝、女は、食事の支度をし、弁当もつくってくれるかも知れない。女は、相変わらずスーパーマーケットに働きに出て、武林の配慮で自分が勤めからもどつてくる頃には、部屋に帰ってきていて夕食をととのえてくれているだろう。食卓をはさんで食事をし、その後、自分は、今と同じようにテレビに眼をむけて酒を飲み、女もテレビをながめている。／ふとんを敷き、女を抱く。恵美子の体しか知らぬ自分が、その女の体に魅せられることがあるだろうか。(第十章)

これが縁談が持ち上がった時に菊谷が新生活として描いたイメージ

である。家事を任せられ、性生活の相手でもあり、菊谷のいとおしむ日常を調べてくれる相手こそが、彼の《妻》であり、それ以上のものを求める気持ちはない。菊谷には、《妻》に対等なパートナーとして期待する気持ちはほとんどないことが分かる。《妻》をイメージしようとしてこの未来図が精一杯であるなら、恵美子との夫婦関係もこれと大差はなかったであろう。

生活を共にしてみれば、かつて主婦であった豊子の手さばきは何もかも行き届いたものであり、菊谷に「家庭というもののありがたさを身にしみて」感じさせた。二人の相性も悪くなく、新婚生活は順調に滑り出した。が、三ヶ月が過ぎたころ、豊子の実家への挨拶に清浦の許可が必要であると知ったことをきっかけに、豊子の態度に異変が起こった。必要な対話をおろそかにした矛盾がここに至って表面化する。豊子は、菊谷の過去にはこだわらなかったが、現在もさまざまな規則や監視の目に縛られていることには、激しい拒絶の反応をみせた。有期刑の者が、その期間を終えと同時に保護観察を解かれるのに対し、無期刑の菊谷は、生涯解除の日を迎えることはない。衝撃を受けた豊子が清浦から聞きだした唯一の解決方法が、恩赦をうけるという道であった。

恩赦のことについては、職務柄、奥さんに話をし、奥さんもそれに気持ち動いたようだが、むずかしいことだな。あなたの場合、生活態度その他について問題はないが、被害者つまりあなたの先妻とその肉親、それに焼死したお婆さんとその遺族に對して、改悛の情をしめしているかどうか、恩赦の重要な鍵になる。具体的には、折にふれて遺族に謝罪の手紙を出し、被

害者の墓に詣でることだ。しかし、現実にはそのようなことができるかどうか。(第十二章)

菊谷の過去を問わなかった豊子が、現在の処遇にこだわるのは、清浦にも菊谷本人にも、想定外のことであった。が、それは豊子が菊谷との結婚生活に満足し、それをより確かなものにしたという思いの現われでもあろう。菊谷の完全な社会復帰のための唯一の道として恩赦をめざすことが、菊谷ができずにいた罪との対話の機会をもたらしした。豊子は、菊谷にその機会をもたすために登場した人物であるといってもいいだろう。

しかし、高崎を相手にしたときは、菊谷の中に、自分の行為の意味を語り合いたいという内発的な欲求があったが、今回の場合はそれとはかなりの距離を置く。菊谷は高崎を失ったことで結局自分の思いを見つめる機会を持つてぬままに今日に至っており、恵美子や望月に対する思いは反発と憎悪で現在も頑なに固まったままであり、対峙するどころか触れることも難しく、生傷のままの状態にある。が、菊谷との生活を完全なものにしたいと急ぐ豊子は、菊谷に対して最も必要なプロセス、すなわち頑な心を解きほぐし、自分の行為を疑問視できるようになるまで待つといった過程を、乱暴な強引さで省略してしまった。

茶筆筒の上に白い布が敷かれ、小さな燈明台に細い蠟燭が灯り、灰壺に立てられた線香の煙がゆらいでいる。位牌が二つ並んでいて、一方に恵美子霊位、他方に老女霊位と金色の文字で書かれている。彼の顔がゆがみ、大きくひらいた眼が位牌にむけら

れたまま動かなくなった。(第十三章)

菊谷の願いは、あと十年か二十年、残された余生を心静かに過ごすことであつた。清浦は菊谷が「前非を深く悔いていると信じて」疑われないが、菊谷には「そんな気持はみじんもな」く、それを「清浦や豊子に気付かれるのが恐ろしく」てならない。殺人という行為自体は反省し、二度と起こすまいという悔悟の情を示しているなら、それ以上の内心の思いは誰にも束縛できない。しかし、菊谷の場合、秘していた自分だけの思いは、恩赦を切望する豊子によって明るみに引きずり出された。菊谷の個人的な思いからすれば、自分は恵美子や望月の肉体を殺傷したが、彼らもまた菊谷の人間としてのありように、そして菊谷がいつくしんで築いてきた人生に斬りつけてきた相手である。老女も望月の母である以上、菊谷には憎悪の対象でしかない。

眼の前に、朱の色がひろがった。位牌が置かれ専攻の匂いなどする部屋は、自分の部屋ではない。／激した感情が、はつきりと憤りの形となり、それは抑えがたいものになった。自分には自分の世界があり、そこに他人が無造作に入り込むことは許せない。(中略) ここはおれ一人の部屋で、お前などがある場所ではないのだ、と胸の中で叫びながら、彼女に近づいた。(第十三章)

この直後、豊子は菊谷によって階段から突き落とされる。すぐに彼女は彼女の死に気づかない菊谷は「自分が身をひそめる世界は、第三

者には理解できぬ特殊な空間で、豊子とともに暮すのは初めから無理であつたのだ」と思いを滾らす。《妻》を「他人」「第三者」とみ、自分の日常を平穩に保つための奉仕者としかみない姿勢が変えられなかつたために、《妻殺し》は繰り返されてしまった。菊谷には、正対して向き合える相手を得ることは不可能なのだろうか。

おわりに

もともと品行方正でおとなしい高校教師であつた菊谷は、犯罪からは程遠い人間であつたはずだ。彼の中にはゆがんだ女性観があり、そのゆがみがあるきっかけを得て外部に露出する。殺意と同時に現われひろがる朱の色は、彼の内面に奥深く潜む《妻》への強烈な支配欲ではなかつたか。

仮釈放中の身でありながら再度の殺人を犯した菊谷には、極刑の可能性も出てくるだろう。彼を支援してきた清浦、秋山、武林夫人らの衝撃も計り知れない。せめてその可能性は、亡くなった豊子を思うことで、犯した罪と向き合う対話が始まるのではないかということだ。豊子は夫に背を向けた恵美子とは異なり、菊谷との関係を深めたがり、彼を愛そうとしてくれていたからだ。むしろ、自分の夫を通常の社会人のレベルに引き上げたい、という打算もなくはなかつたであろうが、大きな罪を背負つた孤独な菊谷を家庭の温かみで蘇生させてくれた女性である。豊子がもたらしてくれたものの多さを冷静に振り返り、彼女が「第三者」ではなかつたことに、菊谷は気づけるであろうか。触れてはならない所に触れたために抹殺した、というのは理由にならない。菊谷は、触れられたくない患部にもっと早く治療の手を入れるべきであつた。その唯一の治療法は、

他でもない豊子との対話ではなかったか。

現在、検挙者に占める再犯者の割合は四三％に達しているという¹⁰⁾。入所者への処遇は衣食住にわたって十分に厳しく、(罰)の役割は機能しているようだが、罪を反省し、真の意味で社会復帰できる人間に蘇生するのには、ふさわしい相手との対話が不可欠であろう。刑務所内外ともに、そのような機会は現在でも乏しいようである。

『仮釈放』は、一九八〇年代の末期に書かれた作品であるが、社会の暗部に光をあて、確かな予見を示し、警鐘を鳴らしていることに驚かされる。もちろん、やむにやまれぬ事情で罪を犯し、心からの改悛の情を抱いて更生した人々が過去を問われずに社会復帰できることは望ましい。そのためにも、対話という血が隅々まで通った社会を指さなくてはなるまい。

注(1) 第一章によれば、正確な入所期間は一五年七カ月とされている。

(2) 刑法第二八条で「有期刑についてはその刑期の三分の一、無期刑については十年を経過した後」に仮釈放ができると定められているが、現実には十年で仮釈放されるケースはないという。菊谷は出所時に「出所する者たちの中で最高に近い部類」(第一章)と言われる金額の作業賞与金を手にしており、所内での労働単価も高く、したがって優秀な服役成績を取っていたことがうかがえる。

(3) 新潮社文庫版『仮釈放』(平成三・一一)。同年十月の日付あり。

(4) 『大衆文学研究』一三七号(平成一九・六)。

(5) 『文藝春秋』九月臨時増刊号「吉村昭が伝えたかったこと」(平成二三・九)所収の「吉村昭著作リスト」より。

(6) 菊田幸一『日本の刑務所』(岩波新書七九四、平成二四・七)によれば、

平成一〇年現在の人口一〇万人あたりの殺人発生率は、アメリカ六・三、フランス三・七、ドイツ三・五等に比べて日本が一・〇とあり(平成一四年には一・一〇)、世界水準に比べればかなり低いことがわかる。一方、法務省犯罪白書(<http://hokusyo.moj.go.jp/>)によれば、平成一五年以降二年まで、全司法版検挙人員中に占める再犯者の割合は一貫して五〇％を超えている(平成三三年度犯罪白書のあらまし)より。

(7) 一八六六(慶応二)年、ロシア。

(8) 菊谷が出所してきた作品内時間は、第二章の「五百円硬貨」の表記から昭和五七年四月以降、そして「国電のガード」という表記から昭和六二年四月以前と限定できる。

(9) 日本国憲法第七三條七号ならびに恩赦法の定めによる。政令恩赦と個別恩赦とがあるが、ここは主に後者を指していると思われる。

(10) 『読売新聞』平成二四年九月二五日夕刊「よみうり寸評」他より。

(11) (6)の『日本の刑務所』のほか、坂本敏夫『元刑務官が明かす刑務所のすべて』(文藝春秋、平成二一・九)、安土茂『実録! 刑務所のヒミツ』(二見文庫、平成一四・五)等がある。

※ 本文よりの引用は、『仮釈放』(新潮社、昭和六三・四)による。なお本稿は、日本社会文学会関東甲信越ブロック二〇〇八年十一月例会での発表をもとにした。ご指摘・ご示唆をたまわった会員の方々に感謝申し上げます。